

Title	No. 8 : 顎骨内病変にみられる歯原性上皮島の病態学的研究
Author(s)	奥平, 紳一郎; 松坂, 賢一; 井上, 健児; 井上, 孝
Journal	歯科学報, 113(2): 200-200
URL	http://hdl.handle.net/10130/3062
Right	

No.7 : 根尖性歯周炎の病態的分析

佐貫展丈, 井上健児, 松坂賢一, 井上 孝 (東歯大・臨検病理)

目的: 歯根嚢胞ならびに歯根肉芽腫は、歯髓の炎症が根尖に波及しその結果、根尖孔外部に炎症性病巣を作るもので、その原因は、根尖孔からの感染を主とする細菌的要因、根管治療薬の刺激などの化学的要因、根管治療中の器具による機械的損傷などを主とする物理的要因に分けることができる。しかし、その病態に関する病因論的分析はほとんどなされていない。今回我々は、東京歯科大学において、病理組織学的に診断された1,590例について、病理形態学的に検討分析した。

方法: 材料は、平成19年1月から平成23年12月までの5年間に東京歯科大学千葉病院に来院した患者で、根尖病変の診断の下摘出され、臨床検査部病理診断科において、歯根嚢胞(954例)または歯根肉芽腫(636例)と診断され、臨床データの揃った合計1,590例を対象とした。検索は病理組織標本内に、異物、細菌、硬組織片の存在症例別に分け検索し、さらに構成する組織について、免疫組織化学的特徴、炎症性細胞の特徴、免疫応答細胞の特徴につ

いて検討した。

結果および考察: 根管充填剤や根管治療薬と考えられる異物が223例(14.0%)、標本内に細菌や真菌などの微生物塊が観察されたものは172例(10.8%)、セメント質や象牙質、感染性硬組織を認めたものは202例(12.7%)であった。裏装上皮に関しては、細菌感染があるものでは強いディフェンシンの発現が裏装上皮表層にみられ、また、硬組織片を含む異物が存在するものでは異物周囲にマクロファージやリンパ球浸潤が顕著であった。

今回の病理組織学的所見より、根管内の細菌の残存が歯科治療により根尖孔外へ溢出される可能性が高い。根管処置時には細菌検査を行い、細菌学的基準に基づいて抗菌薬による治療を行うべきである。根管治療時には、病巣内に存在する免疫応答細胞が出すサイトカイン、周囲組織が出す抗細菌性タンパクなどの定性・定量を行うことにより、病巣の診断を行い、病態の程度を把握し、治療方針決定につなげることが重要であると思われる。

No.8 : 顎骨内病変にみられる歯原性上皮島の病態学的研究

奥平紳一郎, 松坂賢一, 井上健児, 井上 孝 (東歯大・臨検病理)

目的: 顎骨内嚢胞性疾患は、起源が歯堤あるいはマラッセの残存上皮等の歯原性上皮と考えられている。通常であれば、歯の形成を終えた歯原性上皮はレスティングの状態であるが、何らかの原因で増殖した歯原性上皮が様々な病変を引き起こすものと考えられる。顎骨内の病変には嚢胞性病変や腫瘍性病変が発生するが、その発生機序や増殖能についての報告はほとんどない。本研究の目的は歯原性病変にみられる歯原性上皮島の性格を判断することによって、上皮島の増殖活性およびその発生要因解明の一助となることである。

方法: 平成23年4月から平成25年3月までに東京歯科大学千葉病院および水道橋病院口腔外科から提出され、病理組織学的に dentigerous cyst あるいは keratocystic odontogenic tumor と診断された検体のうち、炎症性細胞浸潤のないものを用いた。これらの病変が本学における病理検体のうちの程度の割合に存在するかを統計学的に検討した。通法に従ってホルマリン固定後にパラフィン切片を作製し、ヘマトキシリン・エオジン染色に加えて、免疫

組織化学的染色を行った。免疫組織化学的染色における一次抗体は増殖能を検索するために MIB-1 (Ki-67) を用いた。

結果および考察: 2年間の病理検体全3,360のうち、dentigerous cyst と診断されたものは、457例で、全体の13.6%であった。また、keratocystic odontogenic tumor と診断されたものは73例で、全体の2.2%であった。顎骨内の病変は1,942例で、それぞれ23.5%、3.8%であった。また、Dentigerous cyst の嚢胞壁内に歯原性上皮島がみられたものは98例で、21.4%であった。また、keratocystic odontogenic tumor の腫瘍細胞は Ki-67 に陽性を示す症例が多く、Dentigerous cyst の嚢胞壁内における歯原性上皮島が Ki-67 に陽性を示す症例が散見された。これらの結果から、嚢胞性疾患である dentigerous cyst として診断されたものでも歯原性上皮島が嚢胞壁に存在するものについては、増殖能の検索を行ない、陽性率が高い場合には十分な follow up の必要があると考えられた。